

vol.36

2019 spring

名古屋大学大学院
環境学研究科

環 KWAN

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

特集 ● 生物を知る意味とは?—環境学と生態学



02 エコラボトーク

生物を知る意味とは?—環境学と生態学

夏原 由博 環境学研究科地球環境科学専攻 教授

平野 恭弘 環境学研究科地球環境科学専攻 准教授

西田 佐知子 環境学研究科地球環境科学専攻 准教授

07 環境学の未来予測 ②④

生物を知る意味とは?—環境学と生態学

石坂 丞二／宮脇 勝／中野 牧子

10 環境学の授業拝見!

11 名大さんが行く ②④



名古屋大学大学院
環境学研究科

vol.36
2019 spring

CONTENTS

今号の表紙から読み解く環境学のキーワード ②④

動物にGPSや加速度計などの小型のセンサを装着して、行動を記録する手法をバイオロギングと言う。得られた生態データを解析して、「動物がなぜそのようにふるまうのか?」という謎を解いていくのが我々の仕事だ。

ところが最近、気象学や海洋学が得意とする「環境観測」に動物行動データが使えることがわかってきた。動物の行動は、外部環境の影響を強く受ける。したがって、行動を詳細に記録すれば、行動データから環境に関する情報を引き出すことができる。例えば、鳥は追い風の中では速く、向かい風の中では遅く飛ぶ。これを利用して、鳥のGPS移動経路から風の強さや方向を推定することができる[1]。また、海上で休む海鳥は海流に流されるため、鳥の漂流経路から海流がわかる[2]。観測ブイや衛星からも風や海流の情報を得られるが、これら従来手法による観測の間隙を動物で補うことができるのだ。実際に、環境観測の予測精度を上げることも示されている[3]。

気象学や海洋学だけでなく、最近ではデータ科学や神経科学との接点も増えてきた。私はどちらかと言うと専門性を深めることを重視してきたつもりだったが、いつのまにか拠り所としていたディシプリンから浮遊している気もして、これも「環境学らしさ」かもしれないと思うようになった。環境学も生態学も「～学」も、意外に近いところにある。

地球環境科学専攻 依田 憲 教授

[1] Yonehara, Yoda et al. *PNAS* 113:9039-9044 (2016). [2] Yoda et al. *Prog. Oceanography* 122:54-64 (2014). [3] Miyazawa, Yoda et al. *Sci. Rep.* 5:17672 (2015).
表紙写真 依田 憲

(上) カリフォルニアで繁殖するキタゾウアザラシ
(下) エンペラーペンギンの雛(南極)

生物を知る意味とは？ —環境学と生態学

夏原 由博

環境学研究科
地球環境科学専攻 教授

西田 佐知子

環境学研究科
地球環境科学専攻 准教授

平野 恭弘

環境学研究科
地球環境科学専攻 准教授

森へ、山へ、
フィールドワークする
生態学者

西田 昨年、環境学研究科の地球環境科学専攻に生態学講座ができました。農学や理学ではなく、環境学研究科の生態学講座として、これまで都市環境学専攻に在籍されていた夏原さん、杉谷健一郎さん、依田憲さんが移ってこられました。そこで今回のエコラボトークでは、生態学と環境学について考えてみたいと思います。

最初に、生態学者である平野さんと夏原さんはどんなことをされているのか、お話しいただけますか。

平野 私は森林で「樹木の根」を研究しています。普段森林に行くと上を向いて緑の風景を眺めますが、私は下を向いて歩いています（笑）。月2回は森に出かけて、根を傷つけないようにやさしく丁寧に掘り取って、その根がどういう形をしているか、どの部分にどういう養分が

夏原 由博 なつはら よしひろ

京大大学院農学研究所修士。専門は保全生態学で、特に両棲類など湿地の生物の生態や保護について研究している。著書に地球環境と保全生物学（共著、岩波書店）。にぎやかな田んぼ（共著、京都通信社）など。



ガスカルでも日本でも同じで、山の中に入って溪流にいるオタマジャクシを捕まえたりしています。研究の目的は、多様な生物種が共存することによる生態系機能の促進効果の解明と、人間の影響下で生物多様性を保全するための方法を探索しているということです。

含まれ、どれくらい活性が高い状態にあるのか、土壌も一緒に採取し、生態系機能を調べたり、環境に対する植物の応答機能を調べます。

西田 夏原さんはマダガスカルから帰られたばかりだそうですね。

夏原 やっていることは、マダ

増やし、葉っぱの分解を促進させる。つながりが非常に遠いところまで及ぶというのが、生態学の面白いところでしょう。

平野 西田さんは？

最近の生態学では、今まで以上にローカルなシステムとグローバルなシステムの関係性が注目されていて、研究科のなかでも、シベリア湿地で鉄分が水に溶けることでオホーツク海が豊かになるといった非常に大きなスケールの生態現象に取り組んでおられる人もいます。また、生物間につながりについて、今まで伝統的に重視されていた「競争」と「捕食」に代わり、この20年間では「相利共生」の研究が増えてきました。「間接効果」と言って、「風が吹けば桶屋が儲かる」といったことが起こっていて、私の関連する研究で言えば、オタマジャクシは植物の葉は食べませんが、生息

って、アリにたかれながら植物を見ています。もともとは熱帯の植物の分類を研究していました。熱帯の植物のなかに、「ダニ室」という器官があつて、ダニのような動物との相互作用があるのではないかと研究するようになり、今では植物生態学も研究しています。特に今は、近い種類の生物がまちがって交配しようとした結果、結実率や産卵率など繁殖成功率が下がり、結局はその場所から消えてしまう「繁殖干渉」という現象を調べています。この干渉はタンポポなどで外来種が在来種を追いやる問題にも関係しているんじゃないかと。繁殖干渉は花が咲いている時しか研究できないので、花の時期になるとそわそわしだし、外に行つては虫と競争で花粉をつけたりにしています。

Ecology+ エコロジイの間をつなぐ

西田 生態学は、英語で「Ecology」ですが、一般の人に「エコロジー」は、環境にやさしいというようなことをイメージし、生態学と結びつけることは少ないように思います。生態学者として、言葉の捉えられ方に違和感はないですか。

平野 辞書で調べると、その二つの意味があつたと思います。ですから私自身は授業のなかで「エコロジー」を説明するとき

に、学問としてのエコロジーは生態学を意味すると説明しています。学生のなかには研究テーマを選択する際のキーワードとして「環境」を挙げる人がいます。でも、それはものすごく多様な意味を含んでいるので、しっかり聞かないと何を「環境」と言っているのか、捉え方が違うことがあるので、そこは気をつけています。

夏原 大学院の学生の場合は専門に特化しているので問題はな



平野 恭弘 ひらの やすひろ

名古屋大学大学院生命農学研究科林学専攻修了。博士(農学)。森林総合研究所、スイス連邦森林研究所などを経て現職。樹木の根や森林土壌の生態学を専門。臨床環境学にも取り組む。所属は地球環境システム学講座。

いです。以前、私が所属した学部は、情報文化学部の自然情報学の環境システム系という分野でしたので、学生は生物をやるうとして来たのではなく、広い意味での環境問題に関心がありました。いい意味で言えば視野の広さ、悪い意味では誤解もあります。

西田 誤解と言われましたが、生態学者として、もう少し、これは知っておいてほしいということはありませんか。

夏原 たくさんあります。人間の視点から見た環境と生物の視点から見た環境は違います。地球上、1千万種類の生物がいるなかで、人間が一次生産物の3割くらいを摂ってしまう。なおかつこれからも人間は経済成長を続ける。これは生物にとってほとんどない話なんです、これは科学ではなく倫理の問題になるので、授業では事実のみを話すようにしています。

西田 環境学の学生は、「生物同士は調和して生きている」というような美しい見方をしているように思うことがあります。でも、実際に研究していると、生物自身は調和を求めてやっているのではないことがわかる。一般の人が思っている生物のイメージに関して、生態学からの視点で言えることはないでしょうか。

夏原 見かけ上の調和という意味では、有名な実験がありま

す。一つの区画に一種類の植物を植えた場合とたくさんの種類の植物を植えた場合、種類が多い区画の方が生態系の安定性や生産力も高かった。それは植物の種類によって根の深さが違ったり、その場所の資源を効率よく使っていたからということでした。植物同士は調和しようと思ってることではなく

て、おそらく競争の結果なんだろうけれども、結果的により多様な生態系と安定的な生産力が得られ、人間の目から見たら「善」となっているわけです。

平野 樹木の根の場合ですと、根が吸う養分の形態には好みがあつて、同じ窒素にしても、アンモニア態窒素だったり、硝酸態窒素だったり、必要とするメニユーが違ったりする。それは結局その場所に生活してきた結果であり、その環境があるからこそ、生物がそういうメニユーを吸収して利用する効率を上げてきた。樹種、植物、もちろん動物によってそれぞれ異なる環境と生態の仕組みを、いかに客観的にわかりやすく伝えられ

るかは、生態学の重要なところであり、私自身興味を持っています。

環境と生態学

西田 いろいろな生物と付き合えば付き合うほど、人間が考えることはちっほげだなど思うことがあります。しかし、その人間が地球の土地や水や資源などかなりのものを占めてしまっている。現場に行くと環境を考えざるを得ない。マダガスカルに行かれて、そう感じられたことはありませんか。



西田 佐知子 にしだ さちこ

京都大学文学部卒業。NHKで番組ディレクターをしている間に植物の面白さに惹かれ、京都大学大学院人間・環境学研究科にて植物分類学を学ぶ。京都大学博士(人間・環境学)。所属は地球史学講座(名古屋大学博物館)。専門は植物分類学・生態学。



夏原 マダガスカルは、人が増えたがゆえに農地を増やし、電気がないので薪を使う。その結果、山は丸裸です。そこに対策としてユーカリを植える。緑の山を眺めるとユーカリの木だけなんです。ユーカリは成長が早くて、油を含んでいるので燃料に適し、病気にも強い。普通の動物は食べられないような成分を含んでいる。そうすると人間はユーカリを利用できるんだけど、マダガスカル固有のキツネザルの仲間は、ユーカリの葉を食べることができない。本当ならマダガスカル在来の木を植えればいいんだけど、その木は成長が遅いため、人間にとっては間に合わない。

平野 森林は長い年月のなかで土壌表面に養分を貯めていくのですが、木があまりにも早く成

長すると、多くの養分を一気に吸うので、その土壌が劣化してしまふんです。ユーカリを植えたところでは、そういうことが起こっています。そういう意味でも、私たちは「生態系サービス」——自然からの恵み——すなわち土壌もエネルギーも水も空気も含めた物質の循環の仕組みについて考えなければいけない。それこそが生態学を学ぶ視点の一つであると思っています。単に人間の効率を求めるだけではなく、その場所がどの程度の許容量をもっているのかという生態系の仕組みを通してその環境の持続性を考えることができるように、生態学的情報を皆さんに提供することが私たちの役目かなと思っています。

西田 目の前のこととしてはユーカリの木がほしい。畑ができ

る、生きていける。けれどもユーカリだけにしてしまつて何が起るのか。一見、私たちにどうも無駄に見える自然のものがどんな意味を持っているのか。そういうことは生態学をやっている人間が提示していかなければいけない一つの使命ですね。

環境学研究科にある生態学講座の意義



西田 マダガスカルの話は、生態学にとどまらず、いろいろな要因が絡み合っています。早く育つユーカリを植える。背に腹は代えられない人間。土壌が荒れて生態系が崩れる。環境への影響が出る。そういう問題を俯瞰した時、工学的なツールで解決できる可能性や、枠組みとし

て社会的なルールをつくることは可能です。そういう意味では、環境学研究科って、理学・工学・社会科学すべて入っている。そこがうまく機能すれば、マダガスカルで元々の自然を生かしながら、みんなが生きていけるようになるのかもしれない。他分野の方たちとのつながりがある環境学研究科の生態学の可能性をどう思われますか。

平野 環境学研究科がめざすところに、社会に役立つ人材の育成があります。今、その目標に近い実践的な授業が二つありますが、一つ目は環境フィールドセミナー。ラムサール条約にも登録された名古屋市の藤前干潟や木曾川、長良川、揖斐川の合流地点にある輪中の集落に、3

専攻の学生みんなで行くのですが、その地域の生態、地質、人

とのつながりを学び、調査して、最後にデイスカッションします。そのなかで専攻の異なる学生間で考え方が違うことに気づき、ほかの専攻の人と話ができるだけで面白いと好評です。

二つ目は博士後期課程の学生たちを中心とした臨床環境学研修です。地域が抱える課題を、半年から一年、その地域に入って調査し、問題解決のための提案をします。その提案を見てみると、3専攻の学生ならではのいろいろなアイデアが詰まっています。やはり視点が違う人がいて、一緒にものを考えられるということ、他の研究科にはないメリットだと思います。俯瞰的な視野が養えますね。

夏原 生態学会に行くとき若い人が多いのですが、これからは社会的な問題に対応できる生態学者が、どんどん出て社会で活躍するようになればと思います。そういう意味でも、いろいろな分野の学生と一緒になると現場に入るOR T (On-site Research Training)の機会が与えられるのはいいと思います。

平野 生態学は分野が広く、生物のことだけ知っていてもダメで、やはり社会のことを知っていなければいけないし、工学という分野にもかかわってきま

す。実際に今、国交省は「グリーンインフラ―緑の公共施設」と言っていて、自然が持つ様々な機能を活かして持続可能な地域づくりをしようとしていています。それには生態系の仕組みを知っている人材が必要とされます。生物と人間、社会に関心のある方は、広い意味の生態学をぜひ学んでいただきたい。

西田 私たち環境学研究科は、人と社会、都市における環境と、地球惑星という大きな環境をやっている。生態学は、その間を取り持つような位置にあるのでしょうか。

夏原 そういう位置にあると思うんです。国連の持続可能な開発目標(SDG S)のなかに17項目の目標がありますが、「陸の豊かさを守る」「海の豊かさを守る」といった項目が掲げられています。それが社会にとっても地球にとっても、持続して

いく上で重要である。そういう豊かさを保つためには生態学の知識は不可欠だと思います。

生物を知る人材の役割

西田 最後に、例えば学生に「生物を知ることって、どういう意味があるの?」と聞かれたら、どう答えられますか。

平野 人は生きていく上で、ほかの生物とのかかわりは無視できない。その関係を少しでも知ることによって、実は人間にとってもたくさんのメリットがあるし、生物の仕組みを知ることによって、ひいては人間が恩恵を受けることもできる。私たちの周りにはいろいろなシステム(系)がたくさんある。それを知ると私たちが生きている環境システムとはどういうことか、地域の環境、ひいては地球環境を考えることができるようになる。それぞれの仕組みを知ることとは、私たちの生活を豊かにすることに繋がっているんじゃないかと思います。

夏原 子どもの時に体験するべきなのが、生物は、生きて死ぬんだということです。生物の死を体験することによって、人間の死についても考えることができる。

西田 生物を知る意味というのは、一つは生きているのは人間だけじゃないということ。そして生物は、かなり巧みなものを持っていて、非常に感心するような生き方だったり、形だったり、関係を持っているということ。それが、ちょっと突っ込むだけでわかってくる。生命学や農学部をめざすような最初から生物に興味がある人だったら自分で見ようとするでしょう。でも、環境学に来て、そういうことを全然考えたことがなかった学生たちが、生態学を学ぶと生とデイスカッションすることで、気づき、生物に一日置くことになれば、最終的には生態系と健全に持続していく社会に一歩近づくことにつながるのかもしれないですね。今日はありがとうございました。

今回のテーマは 生物を知る意味とは？—環境学と生態学

私は生物についてマクロに研究する生態学を研究したいと思っていました。人間にとっての環境についても興味がありました。生物と環境の相互作用についての学問である生態学と、特に人間をその主体に充てた環境学は同一のものであるべきです。実際には、海にいる植物プランクトンについて研究していますが、植物プランクトンは人間にとって環境の一部ですし、植物プランクトンにとっての環境にも人間が含まれ、それらはつながっています。

植物プランクトンと人間はどんな関係にありますか？これは私が授業でよく質問することで、多くの学生が困ってしまいます。水の中にいる微生物である植物プランクトンと陸にいる人間、遠い存在です。多くの場合まず出てくる答えは、植物プランクトンは動物プランクトンに食べられ、それを魚が食べ、魚を人間が食べる。いわゆる食物連鎖としてのつながりです。

次に出てくるのは、富栄養化した時に多く発生する赤潮です。植物プランクトンの増加により、増えた有機物が海底に沈降して酸素を消費し、貧酸素

水塊が発生したり、毒性のあるプランクトンが発生することで、自然界や養殖場の魚を殺すことで、人間に矛盾が回ってくる環境問題としてのつながりです。

なかなか出てこないのは、植物プランクトンが水に溶けた二酸化炭素を吸収し、それが有機物や無機物の形で沈降して、海の中・深層に炭素を輸送する炭素循環への寄与です。もちろん炭素だけではなく、窒素や燐の循環も関係しますので、いわゆる物質循環としてのつながりです。

もちろんそれぞれのつながりは独立ではありません。例えば世界的にはまだまだ富栄養化による赤潮の被害は多いのですが、日本では栄養塩の流入を減少する政策によって、最近沿岸の生産がむしろ減少しすぎて魚が取れなくなっている可能性も指摘されています。物質循環をコントロールすることによって、必要な植物プランクトン好きな量発生させられれば、江戸前寿司で有名な東京湾を復活することも可能でしょうし、全国で一番早く水産試験場ができた愛知県の海の魚を、もっと

楽しむことも可能はずです。

残念ながら現状では、人間はそこまですべて植物プランクトンとうまいつながりを持っていないのかもしれない。自分では、一般的には顕微鏡で研究を行う植物プランクトンをリモートセンシングというマクロの目で研究しています。ゆくゆくはその情報を沿岸のデザインに使用して、様々な人にとって好ましい沿岸環境を構築できるようにになると信じています。

人間と植物プランクトンのつながり

宇宙地球環境研究所 石坂 丞二 教授



石坂 丞二

専門はリモートセンシングを利用した海洋の一次生産の動態について研究。学部は生物学、修士は環境科学、博士は海洋学。工業技術院から水産学部を経て、名古屋大学旧地球水循環研究センター、宇宙地球環境研究所教授。

景観生態学と「東海アトラス」

都市環境学専攻 環境・安全マネジメント講座 宮脇 勝 准教授

ランドスケープ・エコロジー学（景観生態学）が国際的に知られ、景観と生態系を配慮することが都市環境において求められる時代である。しかし、日本や東海地方で具体的に景観生態に配慮できているだろうか。国連のいう持続可能な発展に不可欠であるが、そもそも一般市民が景観や生態情報を知り、関心を寄せる仕組みがなく、自治体も経済発展を制御してまで取り組もうとはしていない。そこで私は、学生や一般の人に景観や環境の情報提供の場を考えている。具体的に、名古屋大学の環境総合館1階に、「東海ランドスケープ・オブザーベトリー（東海地方の景観観察拠点）」を設置し、そこで「東海アトラス」というGISマップ集を展示しようと準備している。

「東海アトラス」では、東海地方全体の魅力を地図に表示し、その景観構造を理解できるようにするねらいがある。景観を構成している自然、農産物、生物、歴史、都市の魅力をどのように表示できるか研究している。土地利用の変化からは、生態系が失われる危険が予測される一方で、過疎化から再自然化が予測される地域もある。東

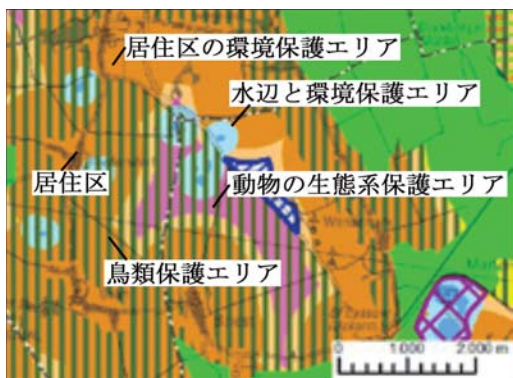
海全体の景観の地図化は、環境への関心を高める第一歩であり、環境教育に不可欠なツールとなると思われ、環境学研究科で誰もが利用できるようにしたい。

さらに、「東海アトラス」を実際の都市計画に活かすことを考えなくてはならない。そこで、国際的に見ると好例が見出される。例えば、ドイツの広域計画では、生態系保護エリアが一般的に指定されている（図）。イタリアの広域計画では、開発エリアと生態系保護エリアの両方を一枚の図面にまとめている。都市開発計画は、これらの景観計画を守った土地利用計画を作成する義務があり、環境のバランスを見て、開発が適切に抑制される仕組みがある。日本では農地や緑地のために開発を抑制する仕組みはあるが、生態系のために抑制する制度はまだない。これを変えるには、一般の人が「生態系」を求める時代にならなくてはならない。現状では東海地方全体で生態系が地図化されていない課題もあり、この活動主旨にご協力いただける方がいらつしやると幸いです。



宮脇 勝

東京大学大学院都市工学専攻博士課程修了。イタリア・ローマ大学国費留学。専門は国際景観学、都市計画、アーバン・ランドスケープ・デザイン。



ドイツの広域計画における生態系と居住区的环境保護規制図

製品を通して生物を知る

社会環境学専攻 経済環境論講座 中野 牧子 准教授

生産や消費といった経済活動と関連して、生物を知ることの意味について考えてみました。

普段、製品を購入する際に生物を意識することは少ないかもしれませんが、ですが様々な製品が生物と関わりがあり、それらを意識した消費をすることは可能です。

例えば、FSC (Forest Stewardship Council) は1994年に設立された非営利団体で、責任ある方法によって管理される森林を認証し、さらにその森林から生産される木材や、その木材を加工して作られる製品を、そうでないものと区別できるように認証しています。認証のための審査は第三者機関によって行われます。認証を受ける管理区画内の絶滅危惧種やその生息域を保全したり、固有種や絶滅危惧種等を含む生態系の状態について評価し記録したりすることが、認証の原則に含まれます。このような仕組みにより、FSC認証のラベルが製品に添付されている場合、消費者は生態系や絶滅危惧種等の種が保全されるような方法で生産された製品であることを知ることが

ができます。

また、MSC (Marine Stewardship Council) は1997年に設立された非営利団体で、持続可能な漁業を認証し、その漁業で収穫された水産物を、そうでない水産物と区別できるように認証しています。認証は第三者機関によって行われます。認証の原則には乱獲を防ぎ、生態系を維持するように配慮することが含まれています。このため、MSC認証のラベルを製品に添付することで、消費者もその製品が生物への影響を考慮したものだと思われることができます。

このように、ラベルを通してその製品に関わる生態系や生物の状態を知ることが可能です。消費者の中には、製品に環境に配慮したことを示すラベルがある場合に、無い場合よりも高い価格を支払ってもいいと考える人がいることが多くの先行研究で明らかにされています。従って、消費者が環境に配慮した製品を選択できるようにするためにはこうした情報を消費者に伝える必要があると考えられます。

消費者に伝えるためには、事業者も

それらの情報を把握しなければなりません。例えば林産物や水産物が消費者に届くまでには、多数の事業者が加工され、流通する過程を経ます。このような複雑なサプライチェーンの中で、事業者は認証された製品を正しく把握する必要があります。このため、FSCやMSCの認証の場合、流通・加工に関わる組織も認証 (Chain of Custody 認証) を取得し、トレーサビリティを確立することが求められています。

経済活動が生態系や生物に配慮したもものなるには、まずはそれらの情報が適切に把握され、伝えられることが重要であると考えられます。



中野 牧子

専門は環境経済学。最近の主な研究テーマは企業の社会的責任に対する消費者の評価。環境研究開発活動の促進要因や、環境情報開示の効果等についても研究しています。



環境学の

授業拝見!

理学、工学、人文社会科学、異なる専門領域の学生がともに学ぶ環境学研究科ならではの授業です。



野村先生

【今回の授業】環境政治セミナー 野村 康 教授

野村康先生の「環境政治セミナー」では、毎年後期は、タイトルを少し離れて「社会科学の方法論」をテーマにしています。

「日本の大学(院)での方法論教育は、指導教員の得意分野を引き継いで学んでいくスタイルが多いと思いますが、欧米では方法論教育が体系化されており、幅広く学びつつ自分のスタイルを確立していく形がポピュラーです。日本でも留学生や社会人など、学生の背景や進路・ニーズが多様化していることを考えると、体系的・包括的に教える必要があるのではないかと思います」と野村先生。

ゼミは、第一回目にリーディング・リストが渡され、毎週異なる本や論文を読んでいくというスタイル。それを通して、複数のリサーチ・デザインやデータ収集の手法を、社会科学における認識論という考え方に沿って体系的に学び、「研究の問い」に答えを導き出すための力をつけていきます。

こうした多様な手法やリサーチ・デザインをまとめて学べるゼミはあまりなく、**その上、英語対応科目ということで、留学生や他研究科からの参加者が多いのも特徴です。**学期の最後には、ゼミで学んだことを踏まえて、各自の研究計画を発表する機会を設けていることもあり、全員が自分の研究に結び付けて熱心に学んでいます。「それぞれが今後、研究者としてだけでなく、政府機関・企業等における仕事の一環として調査を行う際にも、さまざまな手法やリサーチ・デザインが役立つのではないかと野村先生は語ります。



時夢さん(中国)

私の研究テーマは、気候変動について。特にパリ協定における中国の政策転換に興味があり、その原因を調べることが大きな狙いです。この授業は、広い範囲で理論的なことが学べるので、これからの研究に役立つと思っています。



Philemon Maiennaka NANGUさん
(バブアニューギニア共和国)

私はバブアニューギニアの政府機関で働いており、そこから名大に留学しました。政府では地方行政を担当する部署で災害などについて対応しています。この授業では多様な手法が学べるので、それが実際の場面でも役立つと思っています。



今期のゼミは、中国、スリランカ、バブアニューギニアからの留学生が学ぶ。

港湾都市・群山(ゲンサン)の成り立ちを
日韓の視点で解き明かす

ムン・ジウンさん



都市環境学専攻
博士課程

ムン・ジウン(MOON JIEUN)さん

神戸で行われた仁川と神戸の港湾都市に関するシンポジウム。日韓両国の先生たちの間で会場からの質問に答える。



2016年、群山(ゲンサン)での現地調査の際、群山市・群山大学主催のシンポジウムで西澤先生の通訳を務めた。群山市民も多く、自分たちの都市についての日本人学者の見解に関心が集まったとムンさん。

韓国の近代建築史を研究するため、名古屋大学で学ぶムン・ジウンさん。およそ近代と位置付けられる19世紀末から1945年は韓国にとってはその大半が、日本の植民地時代。自国ではあまり触れられることのない時代の都市と建築を、韓国と日本の関係のなかで掘り起こしたい。そこで、都市環境学建築系の西澤泰彦教授につたない日本語で、「行きたいです!とメールしてしまいました」とムンさん。西澤先生の近代建築についての豊富な知識と、楽しく充実した研究姿勢に刺激をもらいながら、名大での研究生活は3年目を迎えた。

今は、植民地時代に、日本に米を送るために港が造られた「群山」という都市について、1899年の開港から1945年の解放、さらにその後1970年代まで、どのように都市が変化したかを研究テーマとしている。「歴史上は19世紀末の不平等条約に基づく開港で造られた都市ですが、実際には、そこに住んでいた人たちがまちづくりに関わっていたことがわかってきた」とムンさん。「都市というのは、そこに人間が住んで、過去から未来へ続いている。だから人と都市の事象を一つずつ解き明かすのは、パズルをみつけるみたいに楽しい」。将来の夢は「まずは博士論文」というムンさんだが、日・韓両方の視点で、その差異を伝えられる研究者を思い描いている。

編集後記

環境学研究科に生態学講座が開設されたのを機に、「生物を知る意味とは?—環境学と生態学」という特集を組みました。生態学の分野で活躍されている先生方に鼎談していただくとともに、異分野でご活躍の先生方にもご自身の専門と生物を関連づけて執筆していただきました。鼎談をお聞きして、「生態学は生物の生態を探る生物学の1分野であるとともに、生物とそれを取り巻く環境との相互作用を扱う学問分野でもある」ことを、恥ずかしながら初めて知りました。また、編集を通して、環境学研究科の裾野の広さを改めて実感しました。生態学講座を迎えた環境学研究科は、今後ますます社会に必要とされる存在になっていくでしょう。最後に、この場をお借りして、お忙しいにもかかわらず登場・執筆していただいた先生方と学生の皆さんに御礼申し上げます。(三村 耕一)

環 KWAN

名古屋大学大学院
環境学研究科

vol.36 2019年3月

【環・36号 広報委員会】

三村 耕一(環36号編集委員長)
角皆 潤 (広報委員長)
上村 泰裕
勅使川原 正臣

白川 博章 編集/編集企画室 群
中野 牧子 デザイン/オフィスYR
西澤 泰彦